

# 交換留学生「地域国際観光プランナー」インターンシップ - 新しい地域づくりと地域活性化への留学生の支援 -

恒松直美

## はじめに

本稿では、広島大学短期交換留学プログラム<sup>1</sup>留学生向けの「グローバル化支援インターンシップ」授業における「グローバル化支援プロジェクト」の一環である「地域国際観光プランナー」の新しい取り組みに焦点をあて、交換留学生インターンの地域活性化への挑戦とその展望について論じる。交換留学生の持つ外国人としての知見と日本社会への強い興味を地域再生に生かし、地域の人々と協働で取り組む「地域グローバル化対応支援プロジェクト」の一つとして、2014年度より「地域国際観光プランナー」インターンシップを開始した。交換留学生主導で動かす本インターンシップ授業の鍵は、学生の動機づけとエンパワーメントである。交換留学生と地域社会が協同で構築する「地域国際観光プランナー」インターンシップの意義と理論的枠組、プロジェクト成功の鍵を握る交換留学生インターンの動機づけとエンパワーメントに関する理論に言及しつつ、グローバル社会における新しい地域づくりを目指した「学生主導型」交換留学生インターンシップについて論じる。

交換留学生インターンが地域社会における異文化理解の促進に貢献し、地域社会と世界とをつなぐ企画に従事するインターンシップの研究はまだ未発展の段階にある。現在、盛んに議論されているグローバル人材育成や異文化理解の課題は、地域社会では現実的にその意味が把握しにくい現状にあることが本インターンシップの取り組みにより見えてきた。地域社会では、外国人との接触も少なく、留学生への対応に戸惑うことも多々ある。本稿では、学生主導型インターンシップにおいて、交換留学生インターンがどのような要因により動機づけされてエンパワーメントするのか、インターンが地域社会で生きる人々に働きかけ、地域社会のグローバル化対応支援をするためのインターンシップ授業構築はどうあるべきかについて考察する。

現在、人口減少により自治体としての存続が厳しい地域が増えている現実についての指摘がされる状況下<sup>2</sup>、地域再生・活性化の施策が日々議論されている。本授業では、「地域

---

<sup>1</sup> 以後、「広島大学短期交換留学プログラム (Hiroshima University Study Abroad Program)」を「HUSAプログラム」と称する。

<sup>2</sup> 日本経済新聞 (2014年5月9日) によると、2040年には1800市区町村の半分の存続が困難となるとの予測について報告されている。また、国土交通省も全国6割の地域で2050年に人口が半分以下になるとの予測がある。

グローバル化対応支援」として、国際的視野から交換留学生インターンが地域の人々と協働で地域社会を世界に開く方策を構築する試みを2014年度より開始した。2002~2011年度まで2週間の「派遣型」インターンシップを行い、2011年度のパイロット・スタディを経て、2012年度に本格的に「学生主導型」の「グローバル化支援インターンシップ」授業を開講した。2013年度は2年度目の挑戦となる。

自国でも日本でも社会体験をあまり持たない交換留学生向けのインターンシップは適切な授業マネジメントを要する。まず、学生の選考が重要なプロセスとなる。そのため、受講希望者の選考と期待マネジメントを目的とする「インターンシップ・プレースメントテスト」を2012年度より導入した。さらに、全学公開でHUSAプログラム以外の学生も募集し参加してもらおうグループ・ディスカッションとPBL (Problem-based Learning、課題発見解決型) 協同学習も導入した。日本語で社会問題を論理的に議論し、協力してまとめ、プレゼンテーションする体験は、交換留学生に刺激をもたらし、日本で仕事をするうえで必要となる実践力を自ら体験する場となる。

留学生が主導権を握り、プロジェクトを立ち上げ、自主的にマネジメントするインターンシップの研究や、インターンシップの具体的なプロセスと実践形態を詳細に論じた研究もあまり発展していない。日本の大学の交換留学生が地域社会とプロジェクトを進める学生主導型インターンシップは未発展と言える。交換留学生インターンによる「地域グローバル化対応支援」の実現のためには、1) 留学生が地域社会における異文化理解やグローバル化支援への対応支援のために地域と協働でプロジェクトを企画する方策、2) 交換留学生インターンの動機づけとエンパワーメント、3) 交換留学生インターンがリーダーシップを発揮し学生主導でプロジェクトを動かすための授業マネジメントと指導<sup>3</sup>、が重要となる。本稿では、「地域国際観光プランナー」インターンシップに焦点をあてつつ、主に1)と2)の理論的背景と実践方法について論じる。

## 地域社会をグローバル社会に開く「国際的体験学習」：個人的視点を社会的視点へ

初めに、広島大学短期交換留学プログラム (Hiroshima University Study Abroad Program、HUSA) に参加する交換留学生の日本の大学への留学の背景について概説し、交換留学生が地域社会や地域学校と協力し、異文化理解促進の支援となる「地域グローバル化対応支援」に取り組む企画の方策について論じる。HUSA 留学生の日本留学の主な目

---

<sup>3</sup> 交換留学生向け「グローバル化支援インターンシップ」の評価指標、インターンのエンパワーメント自己評価についてパイロット・スタディを進めている。本稿では、交換留学生が地域社会と協働でプロジェクトに取り組むインターンシップにおける動機づけとエンパワーメントの理論的背景に焦点をあてて論じる。

的は、主に日本語能力の習得と日本文化理解、そして自身の専攻分野と日本との関連のある授業を受講したり研究することである。2013-2014年度の参加者の専攻は日本語、日本文学、翻訳、教育、経済学、IT、ビジネス、国際関係、工学、物理学など多岐に渡る。国際関係専攻でアジアや日本に焦点をあてて研究する学生、工学で日本の技術を学び将来日本企業に就職することを希望する学生、日本語や日本文学を専攻し、日本留学により研究や調査を行うことを希望する大学院生など、学生の日本への興味と日本留学の生かし方は多様である。2013年度より HUSA プログラム留学生に、日本と自国の比較研究を課題として課しており、各学生が研究テーマを設定し、参加前に自国の調査を行い、参加後は日本に関する研究を行うことで比較研究をするものである。<sup>5</sup> HUSA 留学生の多様性から分かるように、交換留学生インターンの強みの一つは学生の国籍と専攻の多様性である。例えば、2013-2014年度の授業開始時の授業登録者のインターンの国籍と専攻は、韓国、中国、アメリカ、フィリピン、ポーランドで、専攻は、日本語、日本文学、政治学、英語教育、材料工学、物理学と多様である。

交換留学生の日本の大学への留学動機や、日本に関する研究テーマからも、多様な文化と専攻分野を背景に持つ交換留学生が、その多様性と知見を生かし、地域社会や地域学校の異文化理解教育に貢献したり、グローバル社会対応のための施策検討の支援を提供する可能性を持つことが伺える。フランシスコ(2013: 31)は、「社会的意義のある大学」が実現可能なものとして存在するためには、「大学における研究と教育の中核に、社会における今日的な人間的・環境的諸課題が位置付けられる場合のみ」であると述べる。さらに、フランシスコ (2013: 41) は、コミュニティと協働する大学には学際的アプローチが必要不可欠であること、そして大学の学際的アプローチがその地域にとり解放の源泉となることを論じている。HUSA インターンの多様な専門分野や文化的背景と価値観が、本インターンシップのプロジェクトに学際性と多文化性をもたらしている。

2011年度に学生主導の新しいパラダイムで開講した「グローバル化支援インターンシップ」授業において交換留学生の多角的知見と日本社会理解を地域社会での国際理解に生かす道を探ってきた。盛んに議論されている「グローバル化」という言語も地域社会や地域の学校では、現実的に理解されていない状況にある。グローバル化が何を意味するのか、外国人との接触が未体験の人々にとっては言葉だけが独り歩きしている。本インターンシップで留学生インターンと地域の人々が接触することにより、相互に影響を与え合い、変

---

<sup>5</sup> 2013-2014年度は、JASSO (Japan Student Services Organization 独立行政法人日本学生支援機構) 奨学金受給者に自国と日本の比較研究プロジェクトに取り組む課題を課している。中間発表会と最終発表会を開催し、各学生が研究発表するセミナーを開催している。学生が取り組んでいる研究テーマは、日本の教育制度、幼児教育、法律、社会問題、文化、英語教育、言語学、古典、建築、演劇、伝統芸能、IT、観光振興、人権問題など、多岐に渡る。

化していく過程を観察し、外部からの留学生の地域活動への参画が斬新な体験としてインパクトを与えることが分かった。異文化から来た人間と対面し、一人の人として向き合う体験は、どんな文献や教材よりも人に影響を与える現場を観察する機会を持った。<sup>6</sup>

地域社会の人々がインパクトを受けつつも、好意的に耳を傾けるのは、留学生が日本社会や日本の人々に興味を持ち、真剣に観察し、異なる視点や意見を主張する場面に遭遇した時である。外国人のインターンであるからこそ、傾聴すべき存在として、地域社会で受け入れられる現実も見てきた。交換留学生が、一人の外国人としての「個人的」見解を単なる個人的意見として終始せず、地域社会や学校で生かせる国際的視点へと視野を広げ、「社会的視点」に転換して提供し、地域を世界に開くのが本インターンシップである。筒井（2013: 73）は、学生が個人的側面からものごとを見る傾向にあることを指摘し、学生の視点を「個人的視点から社会的視点」に変える教育の重要性について論じている。

留学生が日本の大学に留学し、大学内外で人々と関わる過程で、自国との慣習の違いに戸惑い、違和感を感じることは多々ある。それを個人的な体験から、社会的な体験へと転換し、グローバル社会との向き合い方や、地域社会の人々と外国人はどのように協力し支援し合えるのか、など社会的な課題として捉える時、地域社会と留学生が協同で取り組む新しい教育の現場を創り出す可能性をもたらす。その個人的視点から社会的視点への転換により、フランシスコ（2013: 41）の述べる、「大学の学際的アプローチがその地域にとり解放の源泉となる」場を構築することができる。本「グローバル化支援プロジェクト」は、留学生の持つ特性を地域社会のグローバル化対応や国際教育の発展に貢献する場を構築できる。企画を実践する現場で留学生と地域の人々が向き合う時、本当の意味での異文化間コミュニケーションが生まれ、異文化間の理解の第一歩を踏み出すと考える。

例えば、2012-2013 年度の HUSA プログラム参加学生向けの「グローバル化支援インターンシップ」授業で留学生インターンが企画した「江田島国際交流歴史ツアー」における江田島市での国際交流会議では、多国籍の交換留学生が地域住民と会議を持つという新しい企画が大きなインパクトをもたらした。アジア・オセアニア・北米・ヨーロッパ出身の多種多様な留学生と地域の人々とのディスカッションでは、参加者は、相互に異なる見解や視点を聞き、異なる行動を観察する機会を持った。地域の人々も、「日本的視点」とは異なる留学生の視点を聞き、「グローバル社会」を肌で感じる場を持つことができたと考える。本「グローバル化支援プロジェクト」は、国際的体験学習であり、交換留学生が大学外の社会人と接して社会的知見を得、通常の大学内の「快適ゾーン」を出て、外部の人々

---

<sup>6</sup> 本インターンシップで企画している 2014 年度「倉橋・江田島国際交流歴史ツアー」コーディネーター・インターンシップについては別稿で論じる。本ツアーには新規に呉市立倉橋中学校との国際交流会を盛り込み、中学校教職員・中学校生徒・PTA・保護者・HUSA 留学生・HUSA インターン・担当教員を含む約 160 名が参加する交流会企画が進行している。

と接触しつつプロジェクトに取り組む挑戦である。予測不可能な状況に直面する体験を通じ、実践の場で対応する力をつけるためには、大学での総合的な学びとそれを行動に結びつける体験学習が不可欠であることを知る。

## 留学生が地域社会を世界に開く「地域国際観光プランナー」インターンシップの意義

日本に1年のみ滞在する交換留学生在が、日本の地域社会の人々と協力し、地域再生やグローバル化への対応支援となるプロジェクトの立案と企画を行う「地域国際観光プランナー」インターンシップの意義について、地域再生支援と観光振興に関する理論的背景にも言及しつつ論じる。「グローバル化支援プロジェクト」の一連の取り組みの中で発展させている「地域グローバル化対応支援」プロジェクトは、今後も多角的に地域社会の様々な課題について留学生在が学びつつ貢献できる。2012年度より、スクール・インターン、地域企業のグローバル化支援市場調査、「国際交流歴史ツアー」コーディネーター、東広島国際広報動画作成プロジェクト（東広島市市民レポーター）、江田島市外国人民泊の異文化理解支援、と取り組みを拡大し、2014-2015年度からは「地域国際観光プランナー」を予定し、準備を開始した。留学生的の持つ外国人としての知見と日本社会への強い関心を地域再生に貢献する新しいプロジェクトである。

2011年に学生主導型インターンシップにパラダイム転換して開始した「グローバル化支援インターンシップ」は、交換留学生在インターンがプロジェクトを企画する主導権を持ち、エンパワーメントしつつ企画を進められるインターンシップ構築を目的としている。留学生ならではの持ち味とアイデンティティを生かし、地域の人々とつながりを築きつつ地域を世界に開く企画を提案する。その具体的施策として、1. 留学生在インターン自身が「地域国際観光プランナー」に従事、2. 地域学校・地域社会の「地域国際観光プランナー」の育成支援、の2つに従事する。留学生在インターンの留学生的としての国際的視点と日本社会への強い興味を生かすインターンシップである。

地域の国際観光振興に貢献する「地域国際観光プランナー」インターンシップの目標は以下に集約できる。

- 1) 交換留学生在が、地域社会・地域学校と協力し、大学で学んだ学術知を日本の地域社会で実践知として貢献し、地域社会における異文化理解を促進するとともに、地域の国際観光振興に貢献する。交換留学生的の多様性・国際性と国際的知見を未来の地域づくりや地域活性化政策に生かし、地域社会を世界とつなぐ。

- 2) グローバルな視野から問題解決能力やマネジメント能力、異文化間コミュニケーション能力をつける。リーダーシップを発揮して、文化的多様性を背景に持つ人々と共存して生きていく力をはぐくむ。

地域の観光振興は、アクション・リサーチへと発展させることもできる。交換留学生の持つ日本社会や日本の文化・歴史・芸能に関する強い関心の一つとして位置づけることもでき、前述したような本プログラム留学生の研究として取り組み、地域の国際観光の振興に役立てることも可能である。観光振興の国際比較を研究テーマとして選択した韓国出身の学生もいる。「地域国際観光プランナー」と「地域国際観光プランナー育成支援」の具体的仕事内容を以下に提示した。

表 1. 「地域国際観光プランナー」と「地域国際観光プランナー育成支援」の仕事

「地域国際観光プランナー」	「地域国際観光プランナー」育成支援
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 地域観光を国際的に促進する施策提案</li> <li>● 国際的広報の施策の検討と支援</li> <li>● 歴史資料館での外国人対応の施策提案</li> <li>● 外国語による広報作成・ホームページ作成</li> <li>● 地域の新しい資源の発掘</li> <li>● 地域の人々との国際交流の企画</li> <li>● 地域からのフィードバックに基づき改善策を提案</li> <li>● 地域再生・活性化のためのアクション・リサーチと地域の人々との検討会議</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 地域での外国人対応への助言</li> <li>● 地域社会で「外国語講座」・「異文化理解講座」開催・地域の異文化理解促進</li> <li>● 「グローバル化支援インターンシップ」授業で開催する「地域国際化貢献セミナー」にて「異文化理解講座」を担当</li> <li>● 「外国人から見た地域社会」について意見交換をし、地域を新しい視野から再発見する勉強会開催</li> </ul>

地域の人々と協働で取り組む「地域国際観光プランナー」インターンシップ企画により、交換留学生が地域学校・地域社会と関わりの場を構築することは、交換留学生と地域の双方に、国際的視野から地域社会を捉え直す機会をもたらす。交換留学生から地域社会・地域学校への貢献は、地域再生・活性化・振興の観点から以下に集約される。



1. 地域の課題・地域資源の発掘、新しい発見・指摘
2. 若者・外部者との交流により多様な意見を取り入れる重要性の認識の場の構築
3. 外部者との交流による地域学校関係者・地域内の人・団体への刺激
4. 外国人の知見を導入し国際的視野から地域学校運営・地域活性化を考える場の

構築

5. UIJ ターン<sup>8</sup>のきっかけ作り（外国人の移住も想定）
6. 地域学校・地域社会の国際的 PR（世界への広報）
7. 地域学校と地域づくり・地域活性化・地域再生へのアイデア提案
8. 多文化共生社会を築く支援・グローバルレベルでの協働ネットワーク構築
9. アクション・リサーチの導入により、長期的視野から地域の課題をグローバルな視野から研究し、研究成果を地域に還元

地域社会・地域学校からの交換留学生への貢献は以下に集約される。



### 1. 交換留学生インターンが「地域国際観光プランナー」を体験する場の提供

- 経験豊富な社会人・学校関係者と留学生インターンの企画会議を体験
- 多様な経験・キャリアを持つ地域の人々との出会いの場の提供
- 地域学校・地域社会の課題等について留学生が学ぶ機会の提供
- 地域づくり活動の補助や運営に参加し、運営方法を学ぶ場の提供
- 日本語を使用して、地域の人々と企画を進める力を養う場の提供
- コミュニケーション・情報収集・問題発見の能力を養う場の提供
- 大学での日本語・日本文化の学びを地域の人々との交流で生かす場の提供

### 2. 交換留学生インターンが地域社会で「地域国際観光プランナー」育成支援に携わる場の提供

- 地域の人々の異文化理解を促進するためのセミナーなどを開催
- 地域の文化的資産について研究し外国人の知見を発表する場の提供
- 地域を国際的に開く施策と人材育成についてのアイデア・助言を行う場の提供

### 3. 交換留学生インターンの国際交流会・ホームステイ企画への協力

- 地域学校や地域の人々と連携した国際交流会・ホームステイ企画への協力
- 農業体験、漁業体験、地域文化体験、アウトドア、自然観察、伝統工芸、祭りへの参加など、学校教育への参画への協力と地域文化体験の場の提供
- 交換留学生と日本の地域社会の人々とのつながり構築への支援と留学生が日本を再訪問した際のふるさとの創出

地域社会の活性化政策と地域のグローバル化対応への支援とを関連づけることにより、留学生インターンの力が大いに生かされる場が構築できる。留学生が地域と協働でプロジェクトに取り組む過程で見えてきたのは、地域社会において外国人の存在は、まだまだ未知の領域である現実である。交換留学生が日本に強い関心を示し、日本語を勉強し、日本

<sup>8</sup> 都市圏の居住者が地方に移住する動き（Uターン、Iターン、Jターン）の総称。

の人々と関わることを要望していることは、地域の人々にとり新しい発見であることも多い。初めは「戸惑い」から始まるが、交流の機会を持ち、実際に留学生と言葉を交わし、人として接し始めると、地域の人々は変容し始める。留学生と話すことにも慣れ初め、「また来てほしい」、「もっとこのような機会を創ってほしい」といった要望の声も強まる。そして地域における支援のリーダーの周りに人が集まり始める。変容は、地域の人々ばかりではない。交換留学生にとり、日本の大学への1年の交換留学が多面的に留学生の意識を変容させる体験となっていることが明らかとなっており（恒松：2012b）、インターンシップもまた留学生が日本社会と関わる意味や必要となる力を再考する貴重な体験となっている。

### 「地域国際観光プランナー」としての「国際ガイド」インターンシップ企画

「地域国際観光プランナー」インターンシップは、多様な文化的背景を持つ留学生インターンの知見を生かし、地域の人々と協力して地域の観光の国際的発展の支援を行うものである。2013年度は、「地域グローバル化対応支援」のプロジェクトの一つとして、江田島市における「外国人民泊」の支援を行った。留学生インターンは、「異文化理解講座」や「英会話セミナー」に挑戦し、民家に宿泊する外国人の視点から助言を行った。江田島市は地域活性化政策として「民泊型修学旅行」を積極的に推進し、修学旅行生が民家に宿泊し農業体験や漁業体験をする民泊型修学旅行や、社会人の民泊体験などの企画を進めている（江田島市ホームページ）。<sup>9</sup> 留学生が感じる日本と自国の食習慣や礼儀作法の違いについて生の声を聞く体験や、会議で留学生の異なる行動様式を観察する体験は、外国人民泊に挑戦する人々に新鮮な助言の機会となったと考える。

2014年度より、呉市役所と協力し、呉市倉橋町にある「長門の造船歴史館」の国際観光ガイド・インターンシップ企画をする予定で準備を進めている。1. 「地域の国際観光プランナー」としての国際観光ガイド・インターンシップ、2. 「地域の国際観光プランナー」育成支援、の2つに取り組む企画である。国際観光ガイドとしての留学生インターンの地域社会への参画は、地域の人々にグローバル社会を実感する場をもたらす。地域にある文化的資産を世界に広める「地域国際観光プランナー」は留学生と地域を強い絆で結ぶとともに、地域にうずもれている新しい資産を発掘し、地域を世界とつなげ、世界に開く貢献となる。表1に「地域国際観光プランナー」インターンシップの1年の流れを示した。

---

<sup>9</sup> 江田島市ホームページ参照。



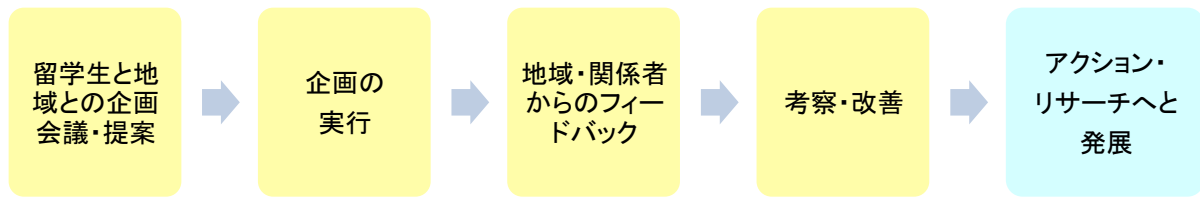
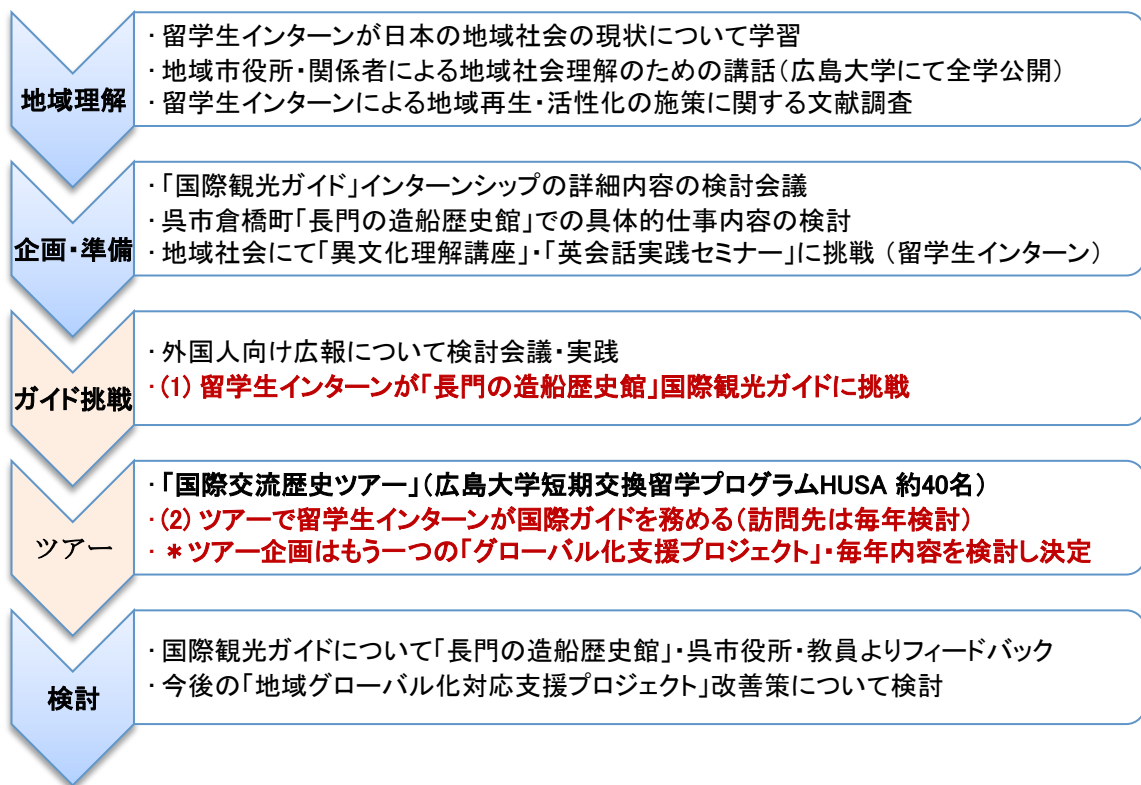


図1. 「地域国際観光プランナー」インターンシップ企画の流れ

呉市倉橋町「長門の造船歴史館」での「国際ガイド・インターンシップ」の1年間の取り組みは呉市役所産業部観光振興課と今後詳細を検討していく。

表2. 「国際観光ガイド・インターンシップ」1年間の留学生インターンの取り組み



### インターンシップにおける内発的動機づけと自己効力感

「地域国際観光プランナー」インターンシップを進めるうえで根本的に不可欠な要素がある。それは、留学生インターン自身の、地域再生への貢献における内発的動機づけであり、動機づけを促す、仕事を遂行する過程での自己効力感である。自己効力感を感じ、強い内発的動機づけがある時、留学生インターンはエンパワーメントし、リーダーシップを発揮してプロジェクトを遂行する。日本社会のグローバル化対応支援や国際的視野からの地域再生に自身の知識が生かされるとの実感を持ち、自分のアイデンティティを明確に確

認でき、日本社会において有能感と達成感を実感できた時、留学生インターンはエンパワーメントする。一部のインターンは、リーダーシップを発揮し、教員の指導のもと、自らプロジェクトを動かす始める。地域国際観光プランナーとしての企画では、自身のアイデンティティと日本社会への強い興味とが融合する形で貢献できる。

2012年度以降の「学生主導型インターンシップ」が、2003年度から2010年度までの「派遣型インターンシップ」と決定的に異なる点は、学生主導型インターンシップでは、学生の「動機づけ」が不可欠な要因であり、動機づけなしには、「グローバル化支援プロジェクト」が実行不可能な点である。「派遣型」では、企業や地域市役所に派遣され、職場では主導的に仕事を動かす立場にないため、動機づけが弱くとも、受け身的立場でその場にいることはできた。主に見学、観察、資料作成などの作業に従事し、学生が主導で企画を進める形式ではないためインターンの動機づけが成果を左右することはなかった。「学生主導型」では、学生のインターンシップをする動機が、プロジェクトに取り組む姿勢に明確に態度として表れる。留学生インターンの強い動機が、リーダーシップ発揮を促し、主体的行動となり、プロジェクトを成功に導く。

2011年度の本インターンシップ授業で筆者がパラダイム転換を行い、授業を「学生主導型」へと大きく変革した重要な理由は、留学生インターンが傍観的・受け身的存在ではなく、自主的にプロジェクトについて考え、自分たちの特性を生かし、地域社会に貢献することによりエンパワーメントしつつ仕事に挑戦するインターンシップを構築することにあった。<sup>11</sup>松尾（2012: 17）は、大学におけるキャリア教育が、学生が主体的に進路選択をし、社会的職業的自立に必要な能力や態度の育成をする教育となり得ているかについて疑問を投げかけ、その要因を探ることにより教育内容や実践形態の発展を図る可能性を説く。さらに、ある目的を果たすために行われた行為が実際には目的と反対の効果を挙げてしまう「逆進性」にも言及し、顧客的な感覚を学生が持ち、人に何かをしてもらったり、言われたことのみ行う姿勢が学生の受け身体質を助長し自立にならない可能性について指摘するとともに、キャリア教育の効果が測定困難な理由として「主体的か」「自立しているか」の判別がしにくいという盲点をついている（松尾 2012: 20）。

学生が受身的になるインターンシップの逆進性の問題は、筆者が取り組んできた「派遣型」の交換留学生向けインターンシップにおける重要課題であった。2002-2010年度までの「派遣型」では、日本で社会体験がなく実務能力のない留学生が主体的に企業等で仕事を行うことは不可能であった。受け入れ企業側がインターン受け入れ期間中の特別なプログラムを用意しない限り、学生が有能感を感じ、主導で仕事を成し遂げるインターンシッ

---

<sup>11</sup> 本インターンシップ授業のパラダイム転換やエンパワーメントに関しては、恒松（2012a、2012b、2013a、2013b）参照。

は困難である。採用予定もない留学生インターンのために企業が特別なプログラムを用意することは非現実的であり、結果、学生が自立を図るものと成り得なかった。この点は、多くのインターンシップの教育内容と形態が必ずしも詳細に提示されてきていない要因の一つとして挙げられるであろう。本「グローバル化支援インターンシップは、学生の意見を反映しつつ、「学生主導型」として学生が企画を進めていくプロジェクト型インターンシップの授業への大きな挑戦である。そのためには、学生が主体となるプロジェクト企画の場を作る担当教員の授業マネジメントが必要不可欠となる。

学生主導型に転換後、単位取得とは無関係に留学生インターンがプロジェクトに意欲的に取り組んだ実例がある。2012-2013年度の中国出身の大学院生で、日本語能力は高かったが、研究による多忙を理由に実習に授業登録しなかった留学生がプロジェクト・リーダーとしてプロジェクトを動かした。2013-2014年度は、日本語能力が中級であったために「グローバル化支援インターンシップ I:理論と実践」のみ受講し、実習は無理だと判断したヨーロッパ出身の留学生が、他のインターンが仕事を躊躇する中、リーダーとともにプロジェクトを充実させ進行させた。東広島市の国際広報動画作成プロジェクトでは、ビデオ撮影と編集を率先して行い動画を完成させ、国際交流歴史ツアー企画では訪問地のガイドブック作製を申し出た。これらの行動様式から、単位取得が必ずしも留学生インターンのモチベーションを上げているわけではなく、単位とインターンの活躍には必ずしも相関性がないことを証明する実例となった。

「グローバル化支援プロジェクト」で留学生インターンを突き動かした動機づけの要因に着目したい。松尾（前掲）は、デシの述べる、内発的動機づけは報酬や強制、統制により達成されるのではなく、世界との関わりを通して有能感を感じたい、自律性を持ち行いたいという欲求によりなされるとの指摘について言及している。この指摘は、本授業において、留学生インターンが、自らリーダーシップを発揮し、クリエイティブな仕事を行ったりなど主体的に仕事をした際に発した言葉を反映している。例えば、通常の留学生活では接することのできない大学外の社会人と接し、自身の日本語能力を駆使してプロジェクトに取り組み、地域社会に貢献できていることに有能感を感じた、と述べた学生がいた。また、指導教員の監督下、自分達が他の留学生が模倣できない形で社会と協働していく企画に挑戦していることに誇りを持ち、エンパワーメントしたと述べた。<sup>12</sup>

「グローバル化支援プロジェクト」の仕事を進める原動力となっているのは、留学生インターンの内発的動機づけである。社会体験のない交換留学生インターンが日本の地域社会と協働で仕事ができるようになる施策として、厳しい基準の「インターンシップ・プレ

---

<sup>12</sup> 交換留学生の「グローバル化支援インターンシップ」によるエンパワーメントや自己評価について現在インタビューを行っている。学生の見解に基づく分析は本稿では割愛し別稿で論じる。

ースメントテスト」で合格者を決定する。さらに、グループ・ディスカッションや PBL 協同学習（課題発見解決型学習）により期待マネジメントを徹底し、厳しい研修を行っている。しかし、強制的にインターンに主導を握らせることはできない。実際、仕事の厳しさについていくことができず、途中でインターンシップをやめる学生も存在する。つまり、十分な動機づけがなければ、継続できないのが「学生主導型」インターンシップである。2013-2014 年度のインターンの場合、内発的動機づけがあるかどうか、留学生のプロジェクトに対する熱心な態度を決定づけており、報酬、強制、統制では、学生の内発的動機づけは達成されなかった。

### 地域活性化への貢献と留学生インターンのエンパワーメント

松尾（前掲）は、レイブとヴェンガーの論じる、個人の動機づけとアイデンティティ確立のための学習としての「正統的周辺参加」の重要性に言及する。新参者でも実践の場に広くアクセス可能でその行動が受容される環境であること、そして、社会活動につながる「周辺」に参加することの教育的意義を説いている。留学生インターンが、地域活性化に協力し、社会活動につながる「周辺」に参加する教育的意義とそれが地域社会で生み出す価値は、学生主導型インターンシップにおける留学生インターンがエンパワーメントした姿が示唆している。交換留学生インターンが動機づけされる重要な要因として、留学生インターンの「正統的周辺参加」が価値あるものとして地域で受け入れられていることがある。コミュニティに属さない、外部から関わる外国人留学生であっても、その価値を見出され受容される環境であることが認識できる場合、留学生インターンは地域の人々と仕事をやるプロジェクトでエンパワーメントをする。そのためには、留学生の外国人としての知見が意味のあるものとして聞き入れられる場である必要がある。それが地域社会で可能となる理由の一つに、留学生が日本に興味を持ち、日本社会を理解しようとする態度を示していることがある。日本文化と日本の人々への強い興味があり、日本とつながりを築きたいと切に感じていることをインターンシップの過程で地域の人々に伝えていることが地域で受容される基礎を築いている。

「学生主導型」へのパラダイム転換後に観察してきた留学生インターンの意欲とエンパワーメントは「派遣型」では見られなかった態度である。ここで、Pink (2009) が動機づけの要因として指摘する 3 つの要素である‘Autonomy’（自律性）・‘Mastery’（有能感）・‘Purpose’（目的）を参考にし、交換留学生インターンの動機づけの要因を分析してみたい。その際、交換留学生が日本社会においておかれている特殊な環境についても考察しつつ、インターンの動機づけを分析する。‘Autonomy’は「自治権」「自律性」といった意味

を持つが、「学生主導型」では、インターンの意見を反映させ、決定権を持たせており、自律性が尊重されている。つまり、インターンは顧客的存在ではなく、企画を提案し、議論し、進行させる力を持っているのである。‘Mastery’は、「精通した知識や技能」といった意味があるが、交換留学生インターンは、日本語能力と日本の理論的理解、そして、外国人として自国の文化の体験的知識を持っており、その知識を貢献することができる。‘Purpose’（目的）は、日本の地域社会のグローバル化対応を支援し、地域の活性化・再生に貢献するという目的設定がある。

日本の大学に交換留学している交換留学生は、外国人の知見を持つと同時に日本に好意的な態度で接し、将来のキャリアも含め、日本社会に強い関心を持っていることは、通常の旅行者としての外国人とは異なる存在である。また、日本の地域社会を世界につなげる本インターンシップは、外国人と接する機会の少ない地域の人々が住む場の文化形成にも影響する大きな影響力のあるプロジェクトである。斬新な新しい挑戦は、地域の人々をグローバル社会に現実的に向き合う体験をもたらす。

Gutierrez (1998: 8)は、‘Power’（力）とは、自身の人生に影響を与えることのできる力であり、自身の価値の表現であり、公的な生活分野に影響を与えるために他者と共に動く力であるとともに公的な決定システムへのアクセスであると論じる。「グローバル化支援プロジェクト」に従事するインターンは、これらすべてに携わっている。そして、その「力」を発揮するプロセスを通じ、地域社会の異文化理解を促進している。地域社会の人々と積極的に議論して協力しつつ企画を進める形での仕事への参画において、留学生インターンは顧客的存在ではない。「グローバル化支援インターンシップ」は、留学生インターンと地域の人々が対等な関係に立ち、大学の国際教育と地域社会の相互支援によりプロジェクトを行うものである。インターンと地域の双方の文化の境界線が交錯し、双方がその境界線に触れつつ、協同で新しいものを構築していくのが本プロジェクトである。自身のもつパワーを感じる時、留学生インターンは自らリーダーシップを発揮し、企画を成功に導く。

## 結語

広島大学短期交換留学生向けに開講している「グローバル化支援インターンシップ」授業において、「グローバル化支援プロジェクト」の一環として新たに取り組む「地域国際観光プランナー」の理論的背景と交換留学生インターンの地域活性化への挑戦の可能性について論じた。交換留学生が外国人であるからこそ持つ強みと日本社会への強い興味という2点を組み合わせた力を地域再生に生かす道を今開拓しつつある。地域の人々と協働する場は少しずつ増え、地域の人々が交換留学生への対応に慣れてきた様子も伺える。「地域国際観光プランナー」インターンシップでは、交換留学生と地域社会の人々が、新しい挑戦

に動機づけされ、エンパワーメントするインターンシップを目指す。交換留学生在が地域社会の持つ日本の歴史的資産を世界に開く貢献をするとともに、地域社会からも、社会人の経験をもとに、地域の人々と協働して企画を進めるためのマネジメント方法や地域ネットワークの活用方法を留学生に伝授することができる。大学の国際教育を地域に開き、共に協力しながらグローバル社会への対応策を検討していく準備が進みつつある。

実習の授業に未登録であってもリーダーシップを発揮した留学生在の存在は、担当教員として本インターンシップのマネジメントを再考するきっかけとなった。リーダーシップの発揮とプロジェクトでのエンパワーメントは授業の単位取得とは必ずしも相関性がない可能性が高いことを 2012 年度と 2013 年度の 2 年連続で観察する結果となった。これらに鑑み、現在、「グローバル化支援インターンシップ」の授業で、「HUSA 交換留學生ボランティア支援制度」を新しく導入することを検討している。その第一の理由は、「グローバル化支援プロジェクト」により多くの交換留學生が参画できるしくみを創ることである。インターンシップに興味を持ちながらも、授業のレベルの高さへの懸念から受講を断念した学生が後からでも参画できるシステムにすることである。第二は、HUSA プログラム留學生の持つ文化の多様性と英語能力も生かして地域への貢献をするインターンシップ授業の構築に挑戦することである。多様性を見地からボランティア導入により、より文化的多様性を背景に持つ留學生が関わるのが可能となる。単位未取得でもプロジェクトでリーダーシップを発揮した留學生が述べた、「もうチャンスはないかもしれない。チャンスを生かしたい。」という声が示すように、1 年という限られた時間しかない交換留学を最大限に生かせるシステム構築を目指す。留學生が日本留学をどう生かすかは、その後の日本との関わりに大きな影響を与えるものであろう。

地域の人々と協働していく過程で発せられた、「誰かが自分に興味を持ってきている。自分の価値観を理解しようとしてくれることに意義を感じた。」という留學生の言葉が示すように、日本に留学してきた交換留學生の持つ知見に耳を傾けた時、交換留學生も心を開き、地域とつながろうとする。交換留學生は、日本社会に対する強い関心から日本という国を選択して日本の大学に留学している。日本をより知りたいと願う交換留學生の思いに地域の人々が心を開くとき、長期的な相互支援の関係が生まれ、本当の意味での地域の国際化も始まっていくであろう。

## 引用文献

- 江田島市ホームページ (<http://www.city.etajima.hiroshima.jp/cms/categories/show/165>) <2014年3月17日アクセス>
- 筒井美紀 (2013) 「個人的なものから社会的なものへ – 私たちは学生をその高みに押し上げる –」『グローバル化のなかの大学 – 教育は社会を再生委する力をはぐくむか –』上智大学グローバル・コンサーン研究所・国際基督教大学社会科学研究所共編、pp.66-74.
- 恒松直美 (2012a) 「省察的实践と『グローバル化支援インターンシップ』 – フェミニズム理論とエンパワメントのパラダイム –」『広島大学留学生教育』第16号、pp.1-15.
- 恒松直美 (2012b) 「短期交換留学生の日本留学による意識変容」『留学生教育』第17号、pp.51-60.
- 恒松直美 (2013a) 「交換留学生向け『グローバル化支援インターンシップ』 – 留学生の異文化性と日本社会の地域特殊性 –」『広島大学国際センター紀要』第3号、pp.1-14.
- 恒松直美(2013b) 「交換留学生向け『グローバル化支援インターンシップ』授業の運営方法の転換と期待マネジメント」『広島大学留学生教育』第17号、pp.1-15.
- 『日本経済新聞』 2014年5月9日朝刊「自治体の存続 人口減で厳しく」
- フランシスコ・デ・ルー (2013) 「大学の社会的責任」『グローバル化のなかの大学 – 教育は社会を再生委する力をはぐくむか –』上智大学グローバル・コンサーン研究所・国際基督教大学社会科学研究所共編、pp.31-49.
- 松尾智晶 (2012) 「キャリア教育の効果と京都産業大学における新たな試みに関する一考察」『高等教育フォーラム』第2巻、pp.17-23.
- Pink, Daniel (2009) *Drive: The Surprising Truth about What Motivate Us*. New York: Riverhead Books.
- Gutierrez, Lorraine M., Parsons, Ruth J. Cox, Enid Opal (1998). *Empowerment in Social Work Practice: A Sourcebook*. Pacific Grove, CA: Brooks/Col Publishing Co.

## 付記

本研究は「グローバル社会におけるパラダイム・シフト：日本の高等教育とキャリアにおける意識変容」（研究代表者 恒松直美・文部科学省科学研究費補助金 2009-2011 年度 基盤 C21530881）による研究成果を生かし、交換留学生向けに新しいパラダイムで「グローバル化支援インターンシップ」の授業を開拓しようとするものである。